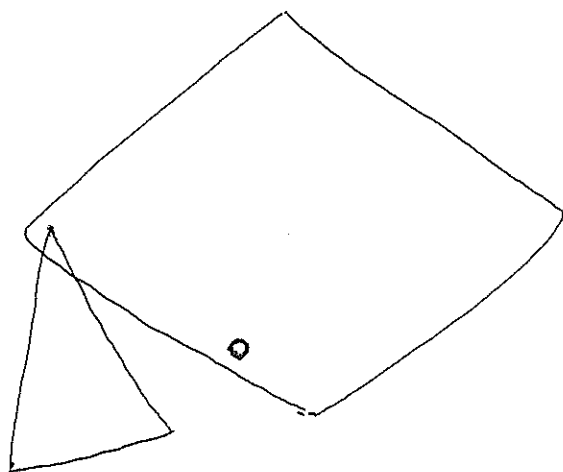


K I O C O T

R E P O R T

vol. 1



about

Bethel's house

2018

KIOCOT

—キオコト— のなりたち

金木 咲花 (第2学) · 木野沢 友里亜 (教育人間学) · 豊原 響子 (臨床心理学) から成る
研究活動チームの名前。かもがわカフェで命名。

あるとき、さきえさんは京都大学で微分積分の授業を行っていました。みんながクスノキ周りを背歩きしながらわいわいやっていると、受講生のひとりのゆりあさんが授業系終わりにさきえさんに声をかけました。

ゆりあ 病理と微分をテーマに学際研究着想コンテストに出たいんです。

へー、いいね (き)

ということ、学際融合教育研究推進センターのみやのさんに連絡をとりました。その時にゆりあはきょうこを仲間にし、こうしてこの3人組が出来上がりました。

ゆりあ 一歩にやろ (学際的) (き) (いいね)

コンテストに向けて、精神科医・中井久夫氏の『最終講義：分裂病私見』から出発して、私たちはどうしたら病理性と創造性の狭間でよりよく生きていけるのかを考えました。

「こいつらの壊れるとき」に閉わる“微分”とは
—— 人間の病理性と創造性の狭間を問う ——
というテーマで発表したコンテストでは、いろいろな人のアイデアや声のおかげもあって、優秀賞を頂くことが出来ました。

き この研究費で べつるの家に行きたい。

ということ、北海道の 三浦河べつるの家に行くことにしました。

いいね (き) (ゆりあ)

べとるの家 とは

とりあえび Wikipediaによると

『1984年に設立された北海道浦河町にある米青神障害等を抱えた当事者の地域活動拠点で、社会福祉法人浦河べとるの家（2002年法人化、東京第10区系表支援B型、生活介護、訪問看護ステーション、ヘルパーステーション、グループホーム等を運営）、有限会社福祉ショップべとるなどの活動の総本山である。そこを暮らす当事者達にとつては、生活共同体、働く場としての共同体、ケアの共同体という3つの性格を有している。』というところだ。

べとるの家の活動

北海道日高地方特産の白高昆布をはじめとした海産物、農産物の通販せかフェ「ぶらぶら」の運営、全国各地での講演活動や年に1度の「べとるまつり」など、活動の幅は多岐にわたっています。中でも有名な取り組みは「当事者研究」で、自分の病気にオリジナルの病名（自己病名）をつけてその病気や苦勞のパターンやメカニズムをメンバー同士で話し合ったりしながら「研究」してその経過や自分の助け方の実践などを報告・発表しています（DVDにもなっています）。

べとるの理念

昇る人生から降りる人生へ 弱さを絆に

苦勞を取り戻す 当事者が苦勞の主人公なのさ べとるに来れば病気が出る

三度の食取オリミーティング 安心にサボれる会社づくり

利益のないところを大切に 弱さの情報は公開

べとるの繁榮は地球の繁榮 自分ひつけよう
自分の病名

手を動かさず口を動かさず 片手手には治すな自分の病名

なほなほ

滞在スケジ

Pay 1

6:30 千歳のホテルを出発 車で多摩川
さすが北海道 道が広くてまっすぐで長い

9:00 ^{すぎ} 浦河に至り着

国道沿いのニューベテるにてオリエンテーション

ス

当事者からスタッフへ。最初は慣れなかつたけどベテるに来たら病気が治っちゃったんですわー。自己病名は統合失調症(他者評価依存型)うつナタイプです。治つたら治つたの正直寂しいと思ふこともあります。今日は皆さんをベテるのいろんな施設にご案内します。よろしくお願ひします。

みなさんの感じから3人くらいの当事者でありスタッフの右の自己紹介をうけ名刺をもらい各施設へ

10:30 ~ 12:00 車で各施設の見学

浦河のまちの中に点在するグループホームを回り、ベテるのキーパーソンの1人、川村Dr.の僅かに浦河ひがしまち診療所を言方明し 運良く副院長のCW JWのお話を聞き、浦河のまちと海を一望できるレピナスの丘にけりきのんびりお話を聞きました。

ここが叫びたい

2:00 ^{すぎ} カフェらぶらぶらでランチ (と久耳患さん1ペア)

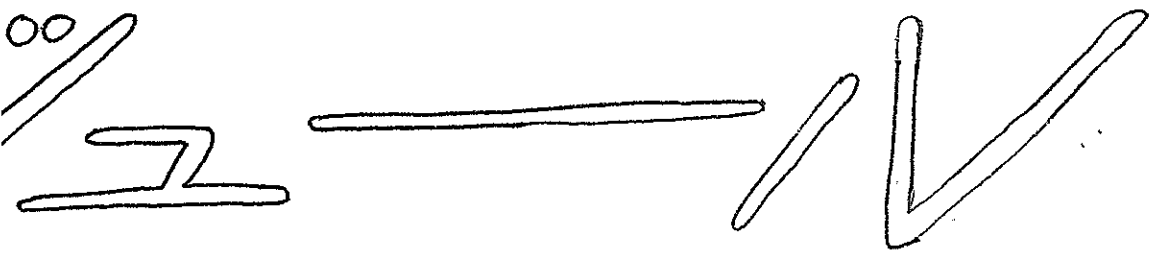
オリエンテーションを一般者に受けた東京からお越しの看護師さん2人とお話しつのおいしくご飯をいただきました。トイレに向かう通路には「ベテるまつり」の中で開催される久耳患妄想大会(通称G&M大会)の賞状の姿が並び並べられています。エピソードのインパクトの強さはさることながら、賞状に書かれる言葉は只島々まであたたかく、与えられる賞品はことごとくユーモアに溢れたものでした。さすがのセンス。

3:45 ^{くらい} 京大第3ミーティングに参加。この日働いた日時を自己申告します。哥欠う人もいます。

4:00 SSTに参加。この日のテーマは「1度女との会話中出で嫌われるようなからというお客さんをどうにかしたい」「車庫ミーティング」の司会進行役になつたとき文句を言われども火暴発しないようにしたい」の2本柱でした。ロールプレイを何回かして①良かったところ②こうすればもっと良くなることを伝えたいきます。発表する人のお悩みもその場でホワイトボードに図式化していくのは向谷地中先生。シンプルで見やすく要点のまとめたイラストとメンバーに必ず深い理解はこれまでの歴史と感心させました。発表者を見守るメンバーからのコメントもあつたかとやさい。

15:00 当事者スタッフ2名と 本日のミーティング・ふり回り

お薬のこと、川村Dr.のことなどを聞きました。"先生のおかげで治つた"という人は予後が悪いとのこと。薬の半分、環境、ベテるのもう半分は治つたねと言われるそうです。



Page 2

9:30くらい 朝用ミーティングに参加

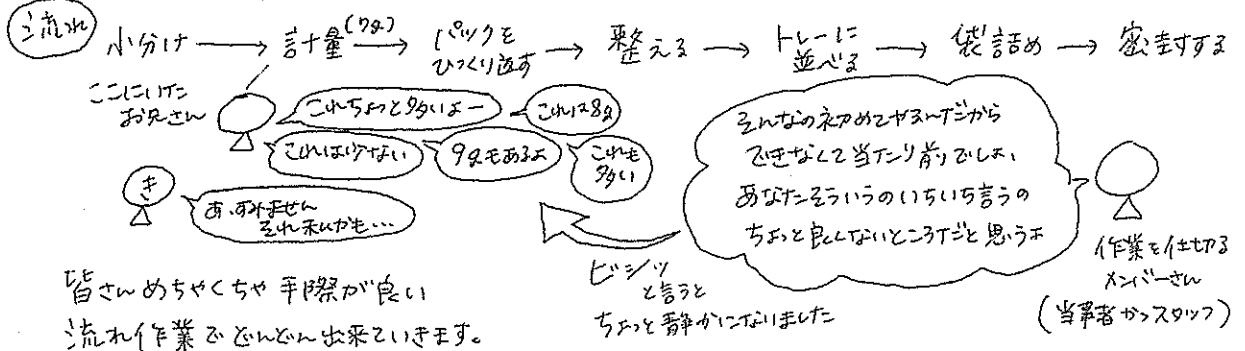
参加メンバーそれぞれが今日の気分とイ本週間、そして何時までいる予定かを報告します。その後「バズる芸能プロダクション」所属の方々にふる見学者への歌のプレゼントをいいただきました。マイクワモ。

各部署からの近況報告も承ります。グループホームの状況、商品の在庫・売り上げ、注文状況など。この途中にあるメンバーさんが「スツと立ち上がり「悲しくせりきれない」の替え歌を歌ってくれました。

「この薄暗いモヤモヤはいつしか白くなるのか」を。かなりグッときて涙が出そうになりました。言葉の力がすごい。掃除の時間中タバコを吸っていた夕度には「さっきの歌素敵だった」と言ったり「俺も奥に入りたい」とのこと。「京都に帰ると俺のこと覚えてね」と言われ、忘れられるわけないぜ」と思いました。

掃除が終わるとひと段落するとコーータイム。この日はバズるの様々な本に登場する有名人、早坂潔さんがいまして。あいさつすると「俺のこと知ってるのか。好きなのか」と言われました。とりあえず握手。

10:30くらい 昆布言語め作業に参加 (メンバーさんは日時系合400円)



12:00くらい 今日ランチは カフェぶらぶら

3分も仕事が無売かはないと言われていた早坂さん、エプロンつけてしっかり働いておられました。改めてよく見たらぶらぶらのスタッフさんも(おれんメンバーさん)も、いろいろ昆布やグッズを売っている方が作った作品が、見返されていて、それはおつち昆布を火景買。

13:30くらい 午後も昆布

おつち昆布は1日2つくらいにしておいた方がよいと言われ、昨日5つ一気に食べたので今日は控えめに。すると「いいのいいの、次の日とかさ言っちゃいけないんだから。1つか1つかだつたらいいの」とフォローしてもらいました。皆とってでも優しいのさす...、好きえんは(いろんなおれんちよまとい中良くなり井戸端会議を癒さす。

14:30くらい? 終わりのミーティング

誰かの自己申告に「そんな多くないべ?!」との声が上がると、誰かがまたそれに対して「いいじゃねえか自己申告なんだから」と返す、そんなところ。

15:00くらい 本日のシェアリング・ふり返し

元頁張らないって難しいわって言う話をしました。あ、この間。

当事者からみたべてるとは

普段べてるで過ごしている当事者の方々にとって、べてるほどのような場所なのでしょうか。2日明いろいろな方がいろいろなことを話してくれました。ここではいくつかのトピックに分けてその語りをまとめてみたいと思います。

お薬

「僕はもともと1日3錠飲んでいましたけど浦河に来ると錠になりまして」と言う人がいましたが、ここでは最低限のお薬は月服用して、仲間たちと過ごしたい

「研究」したりする中で自分の病気と向き合い付き合っていく人が多いようです。ほとんどの人が川村Dr. に担当してもらっていて、頻度は1/w, 1/2w, 1/3wなど人によって様々。 治しません

私は初診のとき川村先生に2日時明語を聞いてもらいました。これまでの苦勞を労ってもらえた気がしました。統合失調症と診断されたこともあったけど川村先生にはうつぶすおとと言われる2週間の成薬期間のあとはお薬を食わずに過ごしています。今はスタッフです。

川村Dr.

元浦河赤十字病院
勤務の精神科医。
現在浦河ひがしまち
診療所の院長。

朝ミーティング中の2人

この明先生に米料理を習おうと思うって言ったら「それとそれのあとどうしたいの、」と言われて「これと米料理教室を明いたり本を出してほしいって言ったら「うちの奥さんでも毎日作ってるのになんか言ったことないよ。あなたが言ってるのはその辺をジョギングしてる人がオリンピックで金メダルをとるって言うのと一緒だよ」と言われた。

それどう思ったの

あーそうだなーって思った。

周りが閉じ込めちゃう笑ってました。

今回直接お会いすることは出来ませんでしたが、当事者の方々からの一言も厚く、彼ら・彼女たちの語りからだけでもそのユーモアセンスと苦勞も本人に返す姿勢を感じることができました。

2月7日

統合失調症の当事者あり
PSWの資格を持つ人はいません

現在スタッフは80名くらいいます。当事者スタッフも多いです。中には舌巻める人もいますね。やっぱり合わなかったんじゃないかな。でも完璧な人はいいですね。朝ミーティングでの体調報告などは常に自分をモニタリングしながらやっていきます。

グループホームでは AM 7:00 ~ PM 7:00 でスタッフが勤務しています。スタッフのいない(以下GH)
夜間はメンバー同士で助け合いをしているとのこと。例えば男女混合11名入居のGHではスタッフが名(資格のない人もいる)が勤務しています。ちなみにべてるには居室床、心理士の資格を持つスタッフはいません。PSW、CW、Ns.などはおられるようです。

休③

蒲河は娯楽の少ないまちなので休日の過ごし方が楽しいメンバーは色々ありますね。TJから休みの日にもグループホームでイベントを企画できるなどしていろいろな工夫をしてひとと交流できる場を設けています。

警察からベテランに電話がわかってることはしょっちゅうあります。

糸吉 藤あざり 言われた。

警察との関係

何かが起こったら当事者とスタッフが一緒に警察署に行きます。警察もベテランのことをよく理解してくれていて、いろいろな訴えを何回かは説明してくれるけれどもある程度でベテランに返すという姿勢心となっているようです。TJで、このような関係性は当然一草一木に出来たものではなく、30年以上の長い歴史のおかげで様々な努力や積み重ねられようやく築かれたものなのだと思います。^{今更}誰の口からも言われては来なかった悲しい事件も過去には起こっています(「シガリマセン」のように一ベテランの家のいまい(2010) 斎藤道雄 ますむ書房 リス録 “青年の死” 参照)。現在は毎日には当事者の要望にシガリマ スタッフが一緒に警察に不届き電話に行くこともあるようです。

蒲河のこがしまち診療所

遅くも出会う副院長さんからお聞きできた話、言葉

元々蒲河赤十字病院には月経金炎病棟が120床ありました。その床数は4余りに削減してきた(通称日赤病院)日赤病院全体の看護士不足から人員配置の見直しの必要性が高まり、糸吉小児科方向にあった糸吉精神科の病床数は2014年4月以降突壊ゼロになっています。

同年川村Dr. は日赤病院を退職、蒲河こがしまち診療所を開設しました。こがしまち診療所はDCが併設されており高齢者やメンバーの子供も参加しています。建物の設計には川村Dr. や副院長もかがわついで、待ち時間がかんたかにならないようにカフェ風のお洒落な空間を一方で、人目に付きたくない人のために壁に囲われた薪ストーブのある部屋も用意しています。その部屋で診察やカンファレンスを行うこともあるのだとか。

メンバーの子供は皆ひきこもりです。子供や高齢者がいることで自分が世話を焼く役になるという(本馬さんが出来たのはいいけれど)感じているのではないかと感じています。

副

待合室にはコーヒーやお茶が用意され、アールグレイや当事者の作品が展示されています。

DCのごはんはメンバーやボランティアの手作りの日もあれば近隣飲食店のごはんをお借りすることもあります。近隣飲食店には直接交渉に行っていて、地域の糸吉者に貢献するという気持ちもあるようです。その他にもなるべく地元のものを地元のお店で買うことを心がけていて、(COOPで買うとお金が糸吉の方に流れていくから)高くても地元のお店を利用すると言っていたのが印象的でした。こうして糸吉の種が重なり持ちつ持たれつのおられるのだなと感じました。元々日赤病院の月経金炎病棟にいた人の中にも退院拒否などの重症の方はこがしまち診療所へ月経連のGHに入居していらっしゃるようです。入院して2週間も車いすの時分かかる場所へしか入院出来る所がないので地域で元気を張っている人がほとんどです。現在入院羽人は月に1人くらいなのだそうです。

私のため ベツる

実際に浦河まで足を運びベツるで過ごす人々と共に過ごす時間は私にとって驚きの連続でした。ここでは①ことばの豊かさ②匿名性について③やさしさやかたしき④寛知と責任について考えたことをつらつらと書き並べておきたいと思います。

① ことばの豊かさ

私が最も驚き感銘を受けたのはベツるの人びとのことばの豊かさでした。ひとりひとりが自らの状態や思いについて語るための自分なりの(用済みしたものではない)ことばを手持っていると感じました。このことばそれぞれが自分の苦勞の主人公であり、その苦勞を語ることばを受け取ってもらえる場所があるからこそなされることばなのでしょう。また、このことにこれほど私がいかに驚きをおぼえ、また当事者とスタッフの見分けのつかなさにも驚いたこと背景には、無意識的な“これほど語るはずがない”とか“これほど傾けられないだろう”といった固定観念に糸縛られていた私がいかに気づきました。このことは、精神疾患を手控して生きる人たちの力を信じているつもりだった自分にも偏見の思いが根深くあるのだということも思い知らせておぼろび、ショックでもありました。ベツるのことばの半手徴として大きなもののひとつにユーモアや笑いといったものがあると思いますが、これらの要素は病理性や倉り造り性を昇華するうえで重要なセントになるのではないかと感じています。30年以上にわたって土音おれ系を続けてきたベツるの文化と、それを土壌にして豊かに広がるベツるの人びとの言葉に私はたくさぬものを貰いました。

② 匿名性について

ベツるの家に馴染める書籍には、ベツるのひとびとが本名で登場することが多くあります。このことについて、本人たちはどう思っているのか今回お聞きすることは出来ませんでした。私はベツるを訪れ本の中で出会った人たちと直接会って、この人たちが本名で書かれていたことになぜだかなんだかとてもしつくり来たのでした。学術的論文では基本的に匿名性が原則とされていますが、例えば「早坂潔さんか」「Aさん」と表記されることにより抜け落ちてしまうことは量り知れないように思っています。裏を返せば、様々な論文や書籍で書かれる“Aさん”にはそれぞれの歴史や苦勞やことばがあるということ、(いま一度心に留めておきたいという思いを強く持ちました。当事者のことを本名で書く、ということにはもしかすると賛否両論あるかもしれませんが、彼らにとったら自分の名前を広く公開することは自分の生き様を伝えることでもありそれに伴う苦勞を自分で引き受けるという意味でも大きな意味があるのかもしれません。個人自由にはベツるをあとにしてから本を語って「これがあの〇〇さん...?!」となるのはなかなか面白い本題でした。皆また会いたいな。

3 やさしさとかなしさ

べつの人びとは 皆それぞれが 並べならぬ 苦勞を 糸至馬鹿し、必死の鬼いひで 浦河に
たどりついたひとも多くいます。そんな人たちの 発することばや 雰囲気は、勿論どこ
どころに かなしさがあることもあるけれども 在り様自々に やさしいのです。この2日間の
滞在でも、あの やさしさは 強く心に 残っています。きっと それぞれが いろんな 苦勞を
1人馬鹿する中で 手に入れた やさしさであり または かわいさであり 人明くささでもあまと思いきや
彼ら・彼女らは 皆 当事者であり "傷ついたり 病弱者" でもあるのだと 感じました。そして
ふんだかんだ言っても 病者とイキ合っただけかなければならないという かなしさもまた べつの中
中には ひっそり けれど しっかりとあるようにも 感じました。ある人は 私たちの滞在中に
「シガッタところを どう生きていかうかという 問題 はついてくるからね」と 言ってくれましたが、
いわゆる 健常者が あまり 深く考えずにいる (ことの多いであろう) 「どう生きていかうか
という 問題」に ひとあら 向き合い 糸売けるその 姿勢に 私には やさしさと かなしさを 感じた
のかもしれません。「悲しくて やりきれない」を 哥った 9歳の 「イ俺のこと 覚えてな」や
早坂潔さんの 「また来いよ」から 抱いた 言いよりのない 気持ちも、これに 似ている かもしれませぬ。

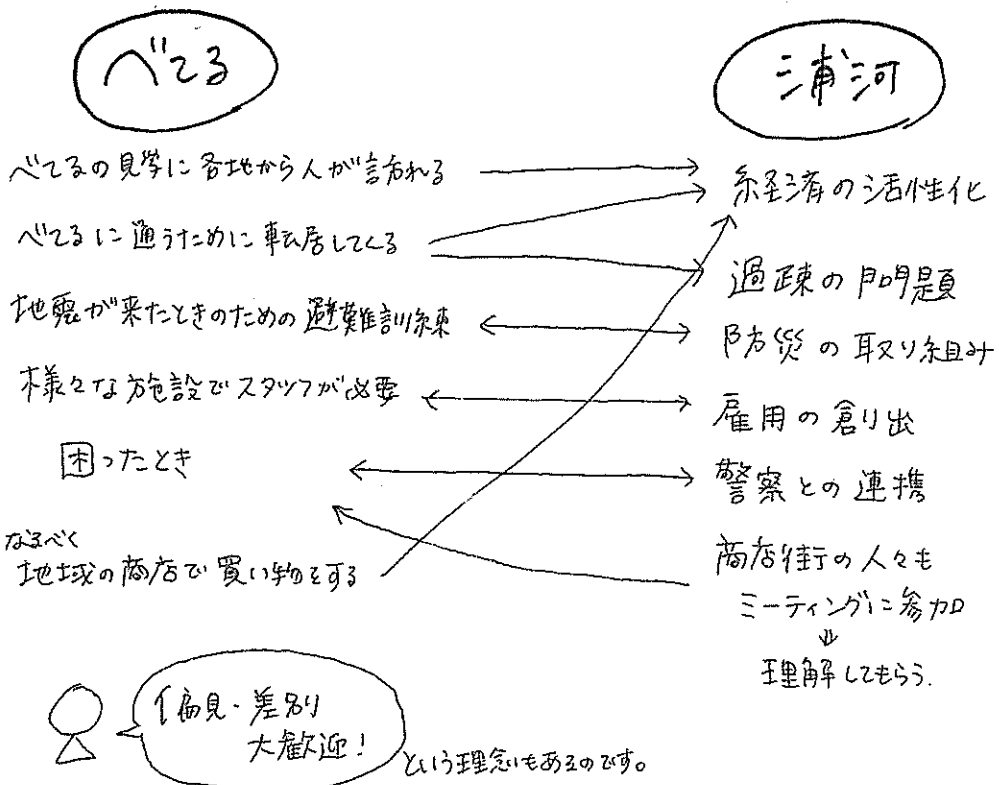
4 意志と責任

最近 読んでいる 「中郵船の世界 — 意志と責任の考古学 —」 (國分 功一郎) が
めちやくちや 面白いのですか、べつでも 意志と責任について あれやこれやと 考えました。
例えれば GHの 勤務体制について。私の 勤務する GHでは 24時間体制で 身職員が
常駐しています。べつでの GHが AM7:00 - PM7:00 のみの スタッフ体制で 運営できているのは、
浦河という 土地 (娯楽が 少なからず 何かあると 対応可能) だからこそ、あるいは 人員的に とうてい
ふたれば 回らないの かもしれませんか、ある程度の 責任を スタッフが 負わない ということでは
とても 興味深いところでした。かといつ 全ての 責任と 当事者が 負うのでもなく、何かあったら
皆で 射撃ラインに行く、あるいは 皆で 考える ということに べつでの 各所で 明らかで 当事者に対する
信頼感を感じました。半青神疾患の 症状の 多くは "意志" ではなくとも ならないもの
ですが、そこで 発生する "責任" の 問題の 扱い方 については べつに 学ぶ ことも多い
のではないかと 感じました。

余言ですが べつでは 義務 (しなればならない) や 否定 (してはならない) の 言い回し
を (ほとんど 問題) ことばが ありませんでした。このことも あの 文化と ついていく 上での 大切な
ポイントなの かもしれません。何より 息苦しさや 各段に 少ない。私も 心掛けた ところでは。

これからの課題

2日間という短い滞在ではありましたが、ベトナムのどんな場所なのか、ベトナムの文化とはどんなものなのか、いろいろなことを実際に手取りで知る事ができました。ここで見てきたことは、ベトナムの取り組みは浦河というまち全体によって支えられているようだということでした。つまり、浦河だからこその出来るという部分も少なからずあるということが分かってきました。では他の場所ではどのようにしていけば、痛理性を創造性として出かできる場が作れるのでしょうか。私たちはそのことについてこれからも考えていきたいと思っております。



30年以上にわたる歴史は決して平坦なものではなかったと思いませんか。このような関係性が出来るようになるにはそれだけの自覚と苦勞が必要なのかもしれないと思います。私たちには何か出来るかな。

考えるヒント その1

べとるを去るひと・残るひと

べとるはメンバーの年齢層が高めです。べとるを去られた当事者が全員べとるに残るわけでもありません。べとるを去る人って、どういう人なんだろう。残った人たちはどういう人たちなんだろう。三浦河は確かに娯楽が少ない。若い人にはちょっと乗り遅れがなさすぎるかもしれない。「昇る人生から降りる人生へ」と言っても、昇らない人は降りようがない。ひと通り昇ろうとしたりもがいたりしてから来るところなのかもしれない。あるいは年齢が高めの人たちの中には若い人は入って来づらいところもあるのかもしれない。ほかにもいろんな理由があるのでしょうか。残ったひとに三浦河に来てからべとるにしようと思ったところまでのイキ馬鹿を丁寧にみてほしい。

考えるヒント その2

つくったひとに聞いてみる

べとるを語るうえで欠かすことのできない存在である 向谷地生良さんと川村Dr.。今回はどちらにもお会いすることが出来ませんでした。このお2人から学ぶことはきっと数えきれないほどあるはず。おそらく、技法以前の、ひととしてどうあるべきであり、ひととしてどう持てるかという姿勢に。向谷地さんは「べとるの家の『非』の援助論」の中で、「医学→「囲」学」、〈看護→「管」護〉、〈福祉→「服」祉〉つまり「囲い込み」と「管理」と「服従」の構造を精神医療の世界に垣間見たと回顧しています(p.42)。私もその一端を担っているが、常日頃から意識していたところ。まずは木菜々な著者から彼らの姿勢を学びつつ、いつか機会があれば直接お会い出来るといいなと思っています。

あとがき

ベテるの家での2日間はそれぞれ濃厚でやさしくもかなしい、
元気になるけれどもどっと疲れる不思議な日々明けました。

こうしてまとめることによりようやく自分の中にも消化できてきたような
気がします。個人的に、いろいろな分りきづまりを感じつつ

あったなかでのベテるでの体験はあまの味は天地がひっくり
返ったかのような感じでした。自分の視野の狭さを痛感したの

でした。まあいいでユーモアたっぷりのベテるの人々からは、

たくさんのお話を学ばせていただきました、またたくさんのお話を

もらいました。一糸者にもベテるを言われたさきえさん、ゆりあさん、

ゆみさん、まち子さんからも、いろいろな視点からみることを学ばせて

いただきました。この2日間（とその後の東京でのいろいろな人々

との出会いも含めて）のことはきっとこれからも私の中で大きな

支えとなることでしょう。ベテるの家とそこにお会った人々との

つながりがこれからも続きますように。また会う日まで

みんなが元気でありますように。 すべてを込めて、

2018.04.09

豊原 響子